

「わたし」は誰？ —人間存在と意味世界—

“深き思索”は語った。「偉大なる問い”への“答え”は…」。

「はい…！」。

「“人生”と“宇宙”と“すべてのこと”への答えは…」。

“深き思索”は続けた。

「はい…！」。

「それは…」。“深き思索”は、そう言って言葉をとめた。

「はい…！」。

「それは…」。

「はい…！…？」。

「42 (Forty-two)」。“深き思索”は極めて厳かに、そして穏やかに言った。

——— ダグラス・アダムス
『Hitchhiker's Guide to the Galaxy』

「あなたは誰ですか」。

もし、突然に質問されたとしたら、多くの人には返答に窮するだろう。まず、最初に思い浮かぶのは、各自の名前かも知れない。でも、名前だけがその人のすべてではない。同姓同名の人物も世の中には沢山いる（かくいう筆者の氏名も極めて一般的であり、同姓同名の同級生と一緒に学んだ経験もある）。

では、性別や国籍、職業や社会的立場などはどうだろう。このような属性は、「わたし」の一面を説明することはできるが、どれも「わたし」のすべてを示すことはできない。社会的な立場が「わたし」のすべてであれば、地位を追われたり職を失ったりすれば、生きていること自体の意味を失うことになるだろう。「あなたは誰ですか」という問いに、「私です」と答えることは可能かも知れない。でも、その場合には「私とは誰のことなのか？」という疑問が残る。

名前や性別、職業といった「わたし」を取り巻く玉ねぎの皮を剥いていった先に、いったい何が残るのか。かつては「属性」と「本質」を区別することで、素朴に本質としての「わたし」を想定することが可能であった。しかし、人間経験のあらゆる領域において価値の多様性が前提とされるようになった今日、このような議論は決して容易ではない。

とはいえ、「あなたは誰ですか」という問いに答えるためには、常に「わたし」の属性が必要であり、それらの属性は「わたし」を取り巻く「世界」における「わたし」の位置づけと深く関わっていることは確かである。日本という国が存在し、その国の教育制度がシステムとして存在していなければ、教員の肩書きを刷った私の名刺には、まったく何の意味もないだろう。

「わたし」の存在に意味を与えてくれる「世界」の存在。「あなたは誰なのか」という問いに答えるために、この「世界」とのかかわりが不可欠なことは確かである。では、その先にはいったい何があるのだろうか。玉ねぎの皮をむき切ったあとに、果たして何が残るのか。人間は、古くからこの問い——何も残らないという議論も含めて——に向き合ってきた。

*

冒頭に引用したのは、イギリスの脚本家ダグラス・アダムス

のSF小説、『Hitchhiker's Guide to the Galaxy (銀河ヒッチハイクガイド)』の一節である。銀河ハイウェイの建設工事のために、障害物となる地球が破壊されることから始まる極めてナンセンスな空想小説だ。でも、ところどころに深く考えさせられる記述があって、現在でも世界的に広く読まれている（というか、コアなファンがいる）。

引用した会話は、世界の根源的な真理を問う「偉大な問い (Great Question)」に答えるために、遙かな昔に極めて高度な知的生命体が、宇宙最大のスーパーコンピュータを造り、750万年の時間（このような深遠な問いを計算するには、これくらいの年限がかかるらしい）を経て、ついに解答を得た時のものである。

コンピュータの名前は、“深き思索 (Deep Thought)”。偉大な問いの内容は、人生 (Life) と、宇宙 (The Universe) と、すべてのこと (Everything) についてのシンプルで完全な回答を求めるといふものであった。しかし、“深き思索”は750万年も答えを待ち続けた知的生命体たちに、なぜか計算結果を告げることをためらう。それでも、最終的に解答を告げることを強要された“深き思索”は、しぶしぶ長年の計算結果を彼らに告げることになる。解答は、「42 (Forty-two)」。

コンピュータは計算機なので、シンプルな解答が数字になるのは当然だろう。しかし、解答は分かっても、その意味が分からない。怒る知的生命体たちに問い詰められた“深き思索”は、もっと時間のかかるプロジェクトを提案し、それを「地球 (Earth)」と名づけることになる。

物語は、このプロジェクトをめぐるドタバタ劇として進行する。ここで全体のあらすじを紹介しても、あまり意味はないだろう。それでも、「人生 (Life) と、宇宙 (The Universe) と、すべてのこと (Everything)」についての究極の答えは確かにあるということ。しかし、その答えの意味は、それぞれが自ら探求しなくてはならない、といった作品のテーマ自体——コアなファンの深読みかも知れないが……—は心に響くものがある。

なぜ、人間には「偉大な問い」への答えが必要なのか。どうして、究極の答えの意味はどこまでも探求しなくてはならないのか。物語の第1巻は、「宇宙のはてのレストラン」に辿りつくところまで続いていく。

*

この連載のタイトルは、「現代世界に生きる人間と宗教」である。これから、しばらくのあいだ、現代社会を論じる多彩な論考を広く紹介しながら、現代の世界に生きる人間の存在状況を明らかにし、そのなかで何かを信じて生きることの意味について考えていきたい。ただ、現代に固有の課題に取り組む前に、まず議論の前提になる「人間」や「世界」や「宗教」といった概念について、ある程度の見通しを示しておく必要があるだろう。

次回からは、まず「人間とは何か」といったテーマについて、少しずつ考えていきたい。